

別の場所へ

石川 寛*

ヘルタースケルター

『ヘルタースケルター⁽¹⁾』の主人公りりこ、人気絶頂のスーパーモデルである。しかし、彼女の富と名声の源泉である並外れた美貌と完璧なプロポーションは「自然体」によってもたらされたものではない。彼女は「骨と目ん玉と爪と髪とアソコ」以外のほとんど全てに美容整形を施した「つくりもん」なのだ。もちろんそのことは絶対の秘密。社長とメイクさんとマネージャーしか知らない。

「つくりもん」は永遠ではない。りりこはいつも「あたしはもうすぐ使いものにならなくなる」という不安、「みんな今ちやほやする人たちだってはなれていくわ」という不安に苛まれている。崩壊の前兆、それはからだのところどころに時折現れるアザである。無理に無理を重ねてきたことによる歪が、整形手術の後遺症としてのアザとなって出てしまっているのだ。鏡の前ではおっと立っていてもアザが少しでも見つかり、たちどころに精神が不安定になる。りりことスタッフは、クスリを飲んでアザを散らしたり、人気のない高級病院で全身をリペアしたり、何とか修繕しようとするのだが、それはおそらく「いたちごっこ」にすぎない。

しかし「いたちごっこ」であってもそうしていかなければ、「全部おじんのパーティー」なのだ。だから「あたしどうなるの？あたし何がしたいの？」という思いを抱えながらりりこは突っ走っていく。「あたしはもう選んでしまっているのだ」から。

* 社会科学研究所助手
2005 年度 COE 大学院生研究奨励金受給者

鏡

鏡はモデルのりりこにとっては必需品だが、ボディビルダーにとってもそうである。ボディビルダーは、自らが創りあげた筋肉をチェックするため、そしてその筋肉を効果的に見せるポーズを練習するために、鏡の前でトレーニングし鏡の前でポーズを取る。三島由紀夫は、鏡に向かってポーズをとるボディビルダーについて次のように著している。

鏡に映る自分の逞しい筋肉は、自分でありながら純粋な「他者」であり、考えられる限りの純粋な外面であるのと同時に、しかもそれは自分の意志とエネルギーによって創造したものなのである。⁽²⁾

鏡に映る筋肉は「外面」とすると同時に自己の内面の現れであるという、鏡が示す二重性。鏡とそれが開く空間について、フーコーも、講演「他なる空間について⁽³⁾」において述べている。そこで彼が展開した議論は、鏡によって開かれるユートピアとヘテロトピアの二重性である⁽⁴⁾。

フーコーはまず、鏡はユートピアである、と述べる。「どこにもない場所」であり「理想郷」であるユートピア。現実には存在しない思考の中の空間。たとえば三島にとってユートピアとは、彼の思考の中にある、在るべき日本の姿、「まほろばのやまとの国」であっただろう。しかし現実の戦後日本は彼の眼からみると、「経済繁栄にうつつを抜かし、国の大本を忘れ、国民精神を失ひ、(…)その場しのぎと自らの魂の空白状態へ落ち込んでゆく⁽⁵⁾」ものであった。三島は自らのユートピア像を守るために現代のヤマトタケルとして事を起こした⁽⁶⁾。ユートピアとはこのような、「人を慰めてくれる」ような「非現実的な空間」である。そして、鏡の表面の奥に仮想的に広がる空間は、まさに「どこにもない場所」である。鏡に映る自分の逞しい筋肉は、「私がないその場所において、私自身の目に見える姿を与えてくれるひとつの虚像」、つまりユートピアなのである。

ヘテロトピアは、このようなユートピアと対比して捉えられる。ユートピアが実在しない「どこにもない場所」、現実にはありえない場所であったのに対し、ヘテロトピアは「現実には位置づけることができる」。日常に連続していながら日常を忘れさせてしまう場所、実際の施設や制度の中に現実には存在しながら人々を現実から運び去ってしまう場所、そのような「異なる場所」、実在しながらさまざまなものに関係し、

関係しながらも、その関係を宙吊りにし反転させ再生産させる、そのような異質性の場所。それは、「人に不安を与えずにおかない」ものかもしれないし、「根源から異議を申し立てる」ものにもなりうる⁽⁷⁾。そのような、現実という「ここ」にありながらこの現実を「別の場所」にするという実在の場所である。

そして、鏡はユートピアである一方で、ヘテロトピアでもある。鏡そのものは現実に存在しており、そして、その鏡は私がある場所に立っている場所へと或る種の作用を跳ね返してくる。鏡の向こう側という仮想的な場から私に向けられたまなざしによって、私は私自身にもどり、再び私自身へと目を向けて私が存在するその場において私を再構成しはじめる。私は絶対的に現実的な自分の現在の位置を知覚するのに、非現実的なユートピアであった自分が映っている鏡からの自分のまなざしという、「自分でありながら純粋な「他者」」であるような仮想的な場を通過しなければならない。鏡とはこのような意味においてヘテロトピアなのである。

そしてそのような「自分でありながら純粋な「他者」」と関係することによってその関係が宙吊りされ自らを再構成していくような空間。そのような空間こそ「ここ」でありながら「ここではない別の場所」である。

アルゼイド

りりこは漫画の中の登場人物だが、実在した人物でりりこと同じような境遇に陥り、最後には後悔しながら死んでいった者がいる。元NFLのスター選手、ライル・アルゼイドである。もちろん彼は美容整形をしたわけではない。彼がやっていたのはドーピングである。

彼は、スポーツ専門誌において次のような告白をした。「私は嘘をついた。あなたたちに嘘をついた。家族に嘘をついた。長い間私はステロイドを使っていないと言い続け、多くの人に嘘をついてきた。1969年に筋肉増強剤を使い始めて以来、やめたことがなかった。1985年にNFLを引退したときもだ。一度も。やめられなかったのだ。そのうちに成長ホルモンも使うようになり、ますますひどくなった。(…)あれは中毒になる。精神的な中毒だ。今、私はこうして病気になり、おびえている…」⁽⁸⁾。筋肉増強剤の使用を「選んでしまった」彼は、NFLでも有数のタフガイとして知られるようになる肉体をつくりあげてゆき、その肉体を維持していくために度重なる医師の忠告を無視してアナボリック・ステロイドを摂り続け、記事の出た10ヶ月後に死亡した。

ドーピング

ドーピングとは一般に、競技に有利な身体機能を身に付けるために薬物を使用すること、と考えられているといえるだろう。ドーピングという言葉が世間に広く流布されるようになったのは、1988年ソウルオリンピックの陸上100m走者ベン・ジョンソンの事件からであろうか。ベン・ジョンソンは筋肉増強剤の使用がドーピング検査により発覚し金メダルを剥奪されたが、ドーピングというとはまず、この筋肉増強剤が思い浮かぶであろう。そして筋肉増強剤に使用される薬物として今も昔も一番多く用いられるのはアナボリック・ステロイドである。

しかしアナボリック・ステロイドを摂取しても、それだけでは筋肉は大きくなり強くならない⁽⁹⁾。ただ摂取するだけで発達するわけではないのだ。筋肉の発達にとって、トレーニングし栄養をとり休養する、というサイクルが絶対に重要である。このサイクルがあってはじめて漸進的に筋肉は発達する。このサイクルに、アナボリック・ステロイド摂取という一つの要素を組み込むことによって、筋肉が劇的に発達する。

劇的に発達したその筋肉は、ステロイドを摂り続けないと萎んでしまう。ステロイドを摂って身体を創りあげその地位に上り詰めた運動選手は、だから、決して摂取を止めようとはしないだろう。サイクルを組みながら断続的に摂り続ける。ステロイドをやめてしまったら、そこからたちどころに転落してしまう。だからアルゼイドは「一度も。やめられなかったのだ」。それは「精神的な中毒」である。

そしてやってくるのが深刻な副作用だ。心臓の異常、肝機能障害、静脈瘤による足の切断、……。最悪の場合、アルゼイトのように死に至るのである⁽¹⁰⁾。

道徳

スポーツを管轄している団体の多くはドーピングを禁止しており、禁止薬物の指定や検査の仕方、違反者に対する制裁措置などを定めているが、そのほとんどは、世界一大きなスポーツ団体である国際オリンピック委員会 (IOC) の設けているアンチ・ドーピング規定を基準にしている。そしてこの、スポーツにおける「グローバルスタンダード」は、ドーピングを禁止する理由として、公平さを欠く、選手の健康を害する、の二つを挙げている⁽¹¹⁾。

IOCのドーピング規定、それは多くのスポーツ選手にとって「法」として機能する。当のスポーツの運営維持のための共通のルールであり、ドーピング規定違反が発覚し

てしまった選手は厳しい「処罰」を受ける⁽¹²⁾、という規範である。

かつてベン・ジョンソンがドーピング発覚により金メダルを剥奪され故郷のカナダへ帰ったとき、空港では彼に対して絶え間なく罵声が浴びせられていた。現在でも或る選手のドーピングのうわさが少しでも立つと、メディアは必要以上に騒ぎ立てる。それは、ドーピングがIOCによって禁止されているからというよりも、ドーピングが「悪い」ことだからだ。正確には、ドーピングは悪いことだという、皆が従うべきだと思われるような社会的コンセンサスがあるからだ。このような社会的コンセンサスは、一般に、「道徳」と呼ばれうるものだろう。ドーピングは「道徳」的に「悪」なのだ。

「道徳」の語で人々が理解しているのは、価値と行動の規則の総体であり、それは家族や教育制度、教会といった、さまざまな指令装置を媒介にして個人や集団に提示される⁽¹³⁾。このように述べているのはフーコーである。われわれはドーピングが「悪」だという価値判断を、そして、その価値判断の根拠となる、スポーツで公平性を欠くことは「悪い」ことだ、スポーツが身体崩壊へと導くというのは「悪い」ことだ、という価値判断を、周囲の人々との会話や学校やメディアによって与えられる。そのように外部によって与えられる参照軸としての「道徳」。そして、「これらの規則や価値は、統合的な教説や明確な教示の形にきわめて明瞭に定式化されるということが起こる⁽¹⁴⁾」。ドーピングが「悪」だという「価値」、それを禁止する「規則」は、「明確な教示」としてのIOCの規定という「法」によって定式化されている。そして、「法」と「道徳」の間関係はこのように密接であり、「法」の領域と「道徳」の領域とは、かなりの領域が重なり合い、影響しあっている⁽¹⁵⁾。

倫理

「高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。徳川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されると、本人の親類が牢屋敷へ呼び出されて、そこで暇乞をすることを許された。それから罪人は高瀬舟に載せられて、大阪へ廻されることであつた⁽¹⁶⁾」。森鷗外によって、病気で自殺を凶った弟にとどめを刺し遠島流刑となった喜助が高瀬川を舟で下る際を、護送の同心・庄兵衛を通して描かれたのが、『高瀬舟』であった。

この作品は医者でもあつた鷗外が安楽死の問題を先駆的に取り上げたものといわれるが、ここで考えたいのは安楽死そのものの是非ではない。「法」に触れることが解っていないながら、あるいは、「道徳」に反していることが判っていないながら、そのような

行為を自ら選択して行わねばならないことがある、ということである。そしてそのような場合、それは本当に「悪」なのか。

庄兵衛は喜助の話聞いて思った。「其俣にして置いても、どうせ死ななくてはならぬ弟であつたらしい。それが早く死にたいと云つたのは、苦しさに耐へなかつたからである。喜助は其苦を見てゐるに忍びなかつた。苦から救つて遣らうと思つて命を絶つた。それが罪であらうか。殺したのは罪に相違ない。しかしそれが苦から救ふためであつたと思ふと、そこに疑が生じて、どうしても解けぬのである⁽¹⁷⁾」。

喜助の決断は「道德」に依拠したものではない。弟を殺したのである。明らかに「道德」に反した行為である。そして「法」に照らし合わせて処罰されようとしている。しかし、庄兵衛は「いろいろに考へてみた末」に「お奉行様の判断を、其俣自分の判断にしようと思つた」が「まだどこやらに腑に落ちぬものが残つてゐる」⁽¹⁸⁾。そして、喜助の「其額は晴やかで目には微かなかがやきがある⁽¹⁹⁾」のであった。

ドゥルーズは、「道德」に対立するものとして、「倫理」を置いた。

かくて「倫理」が「道德」にとって代わる。道徳的思考が常に超越的な価値に照らし合わせて生のありようを捉えるのに対して、これはどこまでも内在的に生それ自体のありように即して、それをタイプとして捉えるタイポロジーの方法である。道徳とは神の裁きであり、「審判」の体制に他ならないが、「倫理」はこの審判の体制そのものをひっくり返してしまう。⁽²⁰⁾

外部の参照軸に依拠する「道德」とは違う、ときにはそれに抗してなされる個人の選択であり決断、それが「倫理」である。その、個人の選択であり決断は、一瞬ごとに更新し続ける生に内在する参照軸、つまり、日々の生活における一つ一つの出来事によって定義し直されていく自らの生の様式、に依拠している。そのような、それぞれに固有の生のタイプに基づいて自らの行いを律していく「倫理」は、ときには法的には罰せられ道徳的にも悪であるかもしれない。超越的な「道德」の審判そのものを「ひっくり返してしまう」のだから。しかし、そのようなものであるからこそ「倫理」は、「道德」や「法」に対する「異議申し立て」にもなりうる。

伝説

では、ドーピングは、スポーツ界への、そしてそれを支えている社会への、「異議

申し立て」といえるのだろうか。

ボディビルダーを取材したルポ『果てなき渴望』では、ステロイドを使用していた或るボディビルダーの、次のような言葉を紹介している。

「ボディビルのようなモノは、ルールに守られ、従った中で凄さ、美しさ、力強さで人々に訴えても全く無意味なのです」。何を美と感じるかは人それぞれだが、「人間が国境や文化をこえて求めるのが力と強さ、美しさではないでしょうか。そこでは一目見て普通と違う過剰が、魂を揺さぶるはずです。そう考える私ですから、ステロイドを使ったボディビルコンペティターになったのです」。しかし日本ボディビル連盟はドーピングを禁止している。「私は失望、落胆と怒りと悲しみを感じます。何と少しでも普通の人々に受け入れて、認めてもらいたい。そればかりしかないアダルト・チルドレンのような連中がコンテストを開いているのですから、コンペティションやショーとしての、日本のボディビルコンテストのレベルが上がり、おもしろくなる日は来ないでしょう」。⁽²¹⁾

このように述べた彼は、かつて大活躍したボディビルダーであり、1986年に日本ボディビル連盟がドーピング検査を実施し始めるとコンテストシーンからは姿を消したが、その後もボディビルのジムを運営し何人かの有名なボディビルダーを育てた。彼の、ボディビルに対する姿勢、ハードでヘヴィなトレーニング、実体験に裏打ちされたトレーニングに関する知識、そして何より巨大な筋肉は、一部のボディビルダーの間ではいまだに「伝説」である。

そのような彼であるから、日本ボディビル連盟がドーピング絶対禁止の方針を打ち出していることや、ステロイドに強力な副作用があることを、知らないことなどありえない。それでも、自らのコンテスト出場はなくなったもののジムの門下生はステロイドを使用してコンテストで凄い肉体を披露し（ドーピング検査で陽性反応が出て失格になった）、専門誌にはステロイド使用を隠蔽するための薬の通信販売の広告を出し、自らもまさに命懸けでトレーニングし「日本一デカイのではないか」と噂されるようになるほどその肉体に更に磨きをかけた。

「法」に違反し身体にも危険が及ぶことをわかり過ぎるほどわかっていながら、彼は敢えてステロイドを使用した。それは、孤高の「伝説」のボディビルダーによる、一般大衆に受け入れられることばかり考えてドーピングを容認しない日本ボディビル連盟やそれに追随する「アダルト・チルドレンのような連中」という低俗卑俗への、命懸けの「異議申し立て」であったのだ……

このように考えてもよいのだろうか。

欲望

ボディビルに熱中した三島由紀夫は次のように書き記している。「世の中で何がおもしろいと言つて、自分の力が日ましに増すのを知るほどおもしろいものはない⁽²²⁾」。ボディビルとは、「自分の力が日ましに増す」ような、筋肉を発達させる日々の鍛錬である。そのような鍛錬にボディビルダーを向かわせるもの、それは「欲望」である。ボディビルダーで筋肉を発達させたいと思わないものはいない。しかしこの「欲望」は、コンプレックスの解消といった満たされるべき空虚などの否定的な観点からのみ捉えられるものではない。筋肉を発達させることは「おもしろい」！ ボディビルダーの「欲望」は、むしろそのような肯定的な観点から捉えられるべきである。それを、三島の言葉は示している。

しかし「おもしろい」にも、さまざまな「おもしろい」があるだろう。筋肉が発達して「おもしろい」のは、細い体がコンプレックスだった人がそれを解消できるからかもしれないし、コンテストで優秀な成績を収めることが出来るからかもしれないし、賞金を稼ぐことができ経済的に潤うからかもしれないし、単に自分がなりたい肉体に近づくからかもしれない。あるいはそういった過程自体が「おもしろい」のかもしれないし、トレーニングすること自体が「おもしろい」のかもしれない。そのようなボディビルの日常そのものが「おもしろい」のかもしれない。

筋肉の発達へと向かう「欲望」はこのように、社会において構成されるさまざまな関係に触発されてさまざまな「おもしろい」という感情を生み出す。これは「欲望」全般に言えることである。性欲は社会におけるさまざまな関係によって触発されさまざまなセックスを可能にするし、食欲もさまざまな触発によって多様な質と度合いを持つ。「欲望というものは機械であり、諸機械の総合であり、機械的仕組みである。つまり、欲望する諸機械であるということである。欲望は「生産」の秩序に属しており、一切の生産は欲望する生産であると共に社会的生産である⁽²³⁾」。ドゥルーズ+ガタリは「欲望」についてこう述べる。「無意識とは機械である」。無意識という機械が他の諸機械（社会的なもの、身体的なもの…）に触発され連結し、絶えず何かを生産している。「欲望」とは、そのような現象であり、過程であり、動きである。「人間身体を多くの仕方で刺激されうるような状態にさせるもの、あるいは人間身体をして外部の物体を多くの仕方で刺激するのに適するようにさせるものは、人間にとって有益

である⁽²⁴⁾」とスピノザは「触発」について述べたが、多様性を持っている触発は「人間にとって有益」である。「欲望」は、このように、あらゆるものに関われ、さまざまなものの触発によって形成され、さまざまな方向へ流れる多様性をもっている⁽²⁵⁾。

〈それ⁽²⁶⁾〉は作動している。ときには流れるように、ときには時々止まりながら、いたる所で〈それ〉は作動している。〈それ〉は呼吸し、〈それ〉は熱を出し、〈それ〉は食べる。〈それ〉は大便をし、〈それ〉は肉体関係を結ぶ。にもかかわらず、これらを一まとめに総称して〈それ〉と呼んでしまったことは、なんたる誤りであることか。いたるところでこれらは種々の諸機械なのである。⁽²⁷⁾

しかし、「欲望」の流れを調節しようとするのが、資本主義社会である。浅田彰は近代資本主義について、ドゥルーズ+ガタリの欲望論をふまえた議論の中で、「位置を与えることによるスタティックな安定化ではなくて、一定方向に走らせることによるダイナミックな安定化を行うメカニズム⁽²⁸⁾」であると述べているが、社会においてさまざまに流動するさまざまな欲望の衝突や交錯を、資本主義のシステムは調節し、一方向に走らせようとする。

典型がオイディプスの三角形である。ボクはパパの介入のせいでママとの直接的合一を断念しなければならないが、そのパパも神ではなく単にボクより先にいたに過ぎないのだから、パパをモデルにして追いつき追い越せばいい。追いつき追い越せ。さまざまなものとの触発と共にあって多様な方向へと開かれていた「欲望」は、ここでは一つの方向に向けられたものにしかならなくなっている。

際限がない「欲望」が一つの方向に突き進む。りりこは整形に整形を重ね、アルゼイドはステロイドを使い続けた。あのボディビルダーのドーピングは「異議申し立て」などではないし、「欲望」の解放でもない。調節されてしまった「欲望」であり、彼らにとってのその流れはもうすぐ終わりを告げるだろう。彼らの生そのものが終わってしまうのだから。

真正性

りりこは、周囲への横暴な振る舞いが度を増し、わがままな素行が悪評を広め、さらにドタキャンを連発。寝る間もなかったほどの仕事はあっという間に激減し、人々の話題にも上らなくなってしまう。さらに、整形を施し続けていた外科医が、不当な

医療行為の廉で逮捕。定期的な治療と投薬を続けられなくなってしまい、完璧だった美貌も、その崩れをメイクで隠すことさえ困難になってくる。りりこの本格的な崩壊が始まったのだ。

りりこのカリスマに操られドラッグとセックスに溺れていたマネージャー、彼女はしかし、りりこほど「強く」なかった。偶然手に入れたりりこの過去が記された書類をマスコミにばら撒いてしまう。りりこの全てが暴露されてしまうのだ。

そして設けられた記者会見。その直前、りりこは控え室のホテルに、くり抜いた一つの眼球だけを残して姿を消す。

ところで、フーコーには、数多くはないがサルトルに対して言及している件がある。「人間は知識とか普遍的法則とかを頼りにせず自己自身を創り出さねばならないとすれば、あなたの考えでは、どのような点でサルトルの実存主義と違っているのでしょうか」というドレイファスとラビノウからの質問に対するフーコーの答えがそれである。そこで彼は、自己はあらかじめ与えられているのではないというサルトルの考え方には同意しつつも、サルトルはそこから「真正性という概念によって、自己自身でなければならない、本当に自己自身でなければならないという考えに後退している」、として批判している⁽²⁹⁾。

「真正性」は「強さ」を産む。あらゆる問題は「これは自分にふさわしいだろうか」という点から判断され、「真正なる自分」へと絶えず還っていく。りりこにとって自己はあらかじめ与えられたものではなかった。彼女は普遍的なものを頼りにせず、「道徳」や「法」に依拠せず、むしろそれらに反して、自ら「選び」、自己自身を創りあげていった。その創造は、常に「真正性」へと送り返されることによって構成された。自分が「選んだ」美しい「幸せ」へと向かっていること、話題の中心の人気モデルであること、常にそこへ立ち戻って構成される自分、そのような「真正なる自分」という存在様態には、揺るぎのない「強さ」があった。

しかし、自己を真正なるものとして構成する「強さ」は、自らの行為の規格化へと導くことにもなる。そこからは、調節された「欲望」の流れに抗うものは出てこないだろう。むしろその流れとその方向性を強化する。だからりりこの「欲望」は止まることがなかった。彼女は破滅への道へとひた走った。

自己の「強さ」ゆえに自己の「欲望」に抗えないという矛盾。「かっこいいけど、さみしい」、「なぜだかわからないけど、ひかれる」、「羨ましいような、かわいそうな」という読者のりりこへの想い⁽³⁰⁾は、この矛盾のあらわれであり、「強さ」への羨望で

あると同時にその「強さ」ゆえに「欲望」に邁進し堕ちてゆくものへの憐憫であるような二重性のあらわれであろう。

われわれはりりこほどの「強さ」を有してはいない（だからわれわれと同類であるマネージャーは秘密を暴露してしまったのだ）。しかしわれわれは或る程度までりりこである。りりこが姿を消した後、巷では彼女についての「さまざまな説話が勝手につくられ語られた　さまざまなヴァージョンで」。しかしあれだけ女の子を熱狂させたりりこはその後、あっという間に忘れ去られ、そして東京の空の下、女の子たちの声が行き交う。「最近 ROMIX っていいよね~/今ってかんじ~/あたしも ROMIX みたくなりたーい」「やせてー」「モテたーい」「キレイになりたーい」「お金持ちになっていくらししたーい」「ねえねえ　今度あたし　アレねらってた~/アレいいよね~/えー　アレ欲しい~/アレ超可愛いよね~/アレ超高いけど~」。「欲望」に衝き動かされ「欲望」が前進するわれわれの声である。

みんな何でもどんどん忘れてゆき　ただ欲望だけが変わらずあり　そこを通り過ぎる　名前だけが変わっていった。⁽³¹⁾

りりこ、それは、われわれ自身の中にあるものの、いきすぎてしまった姿という「仮想的な場」、つまり、鏡に映ったわれわれ自身の姿なのだ。そして読者のりりこへの想いは、そのような「仮想的な場」にあるものの激しさやかっこよさへの願望であり羨望である。

そして、あのボディビルダーも、日本のボディビルダー達にとって、鏡に映った自らの姿である。毎日鍛錬に励む多くのボディビルダーの、一部が肥大化された分身であり、鏡に映った「自分の逞しい筋肉」なのだ。ボディビルダーでステロイドの使用を一度も考えたことのない人はおそらく存在しない。ドーピングをするかしないかの葛藤はどんなボディビルダーも経験するだろう。その葛藤を自らの「欲望」と「強さ」によって打ち破り、ステロイドを利用して日本人としては類まれな肉体を創りあげたあのボディビルダーに対して、魅かれるボディビルダーは少なくない。彼はいまだに「伝説」である。

しかしわれわれは、鏡の像をそのままひきうつすのではなく、鏡の向こう側という仮想的な場からわれわれに向けられたまなざしによって、われわれを再構成するべきだ。「ここ」を「別の場所」にするべきである。「真正性」による「強さ」に裏打ちさ

れた「欲望」に衝き動かされてはならない。その「欲望」の流れに「異議申し立て」をしなければならない。そうしなければ、りりこやアルゼイドのように、そしてあのボディビルダーのように破滅の道へと進んでしまいかねない。

脱出

フーコーは言う。自己を創りあげること、真正性の観念を結び付けてはならない。「われわれは自己自身を一個の芸術作品にしなければならないのです」⁽³²⁾。

自己を創りあげること、自らの生を芸術作品にすることにしていかなければならない。

そこで重要になるのが「倫理」である。それぞれの選択が、日々の生活における一つ一つの出来事によって常に定義し直されていく、常に創りあげられ変容してゆくような差異化の原理に基づく自らに固有の生の様式に基づいて自らの行いを律していく「倫理」。そのような「倫理」をフーコーは、古代ギリシアにみた。

フーコーのコレージュ・ド・フランスにおける最後の講義は、古代ギリシアにおける真理を語る勇気、「パレーシア」という概念についてであった⁽³³⁾。古代ギリシアにおいて、パレーシアを行使しているといわれるのは、そしてパレーシアを語る人として認める価値があると判断されるのは、それを語ることでその人がリスクを引受け、危険を冒す場合に限られる。ギリシアでは、ポリスの大多数の意見に反したことを語るのは、危険なことであった。あるいは、王や僭主が正義に悖ったことをしていることを当の本人に告げることも、危険なことであった。そのような「異議申し立て」に伴う危険を引き受ける「勇気」。「ですからパレーシアとは、危険に直面して語るという勇気と結び付いているのです。危険があるにもかかわらず、真理を語る勇気が求められるのです⁽³⁴⁾」。

われわれは、「真正性」に基づいた「強さ」に対して、そしてそれへの共感や憧れに対して、そのような「欲望」の流れに対して、「勇気」を持って「異議申し立て」をするべきだ。われわれは勇気を持ってドーピングにNONを突きつけるべきである。

『ヘルタースケルター』の結びの部分、りりこはホテルの一室に血だまりの一個の眼球だけを残して姿を消した。彼女は「脱出」をしたのだ。しかしそれは死への脱出ではない。5年後、彼女は東京から遠く離れたメキシコの地で、片目にアイパッチを着けてフリークスで有名なクラブにいた。『ヘルタースケルター』の最後のページは、彼女のショウが始まる場所。そこで「to be continued」。そして彼女の生は続く。生

に外部はない。「ここ」を「別の場所」にしていくしかないのである。

注

- (1) 岡崎京子『ヘルタースケルター』祥伝社、2003
- (2) 三島由紀夫「ナルシシズム論」『三島由紀夫全集第三十二巻』、新潮社、1975、pp375-389、引用は p384
- (3) Michel Foucault, *Dits et écrits*, vol.4, Gallimard, Paris 以下 DE IV と略記、pp752-762
- (4) 鏡の比喩に関しては DE IV pp755-756
- (5) 三島由紀夫檄文は辻井喬『ユートピアの消滅』集英社新書、2000、p76
- (6) 三島とユートピア思想に関しては、辻井喬『ユートピアの消滅』、pp69-77 参照
- (7) Michel Foucault, *Les mots et les choses. Une archéologie des sciences humaines*, Gallimard, Paris, 1966, pp9-10
- (8) "I'm Sick and I'm Scared", Lyle Alzado (as told to Shelly Smith). *Sports Illustrated* July 8. 1991. pp21-27. ライル・アルゼイドは「闘いたくないと思う男に会ったことはない」という名文句で知られ、相手チームからは恐れられ、ファンからは絶大な人気を得たタフガイであり、NFL 引退後しばらくは俳優に転向していた。この記事の中で彼は、ステロイドと成長ホルモンの副作用で脳リンパ腫に冒された、と告白している。
- (9) 大きい筋肉は強い筋肉である。筋肉は大きければ大きいほど大きな力が出る。要は使い方である。「ボディビルダーのような大きな筋肉はみせかけの筋肉にすぎない」という人は、単に、筋肉の使い方、力の出し方がわかっていないだけである。
- (10) 薬物の医療用ではない、長期に渡る過剰摂取は、肝臓に深刻なダメージを与える。それは胆汁分泌停止や肝細胞のダメージ等の組織変化を起こし、黄疸や突然の肝機能低下となってあらわれ、やがて肝硬変から肝臓ガンへと移行する。また、腎臓にも多大な負担を掛ける。腎臓障害が起こり、腎不全から尿毒症、そして腎臓ガンになっていく。前立腺肥大、睾丸や卵巣の機能低下、陰萎萎縮などが起き、前立腺ガン、精巣ガンなどを起こすこともある。動脈硬化、脳血栓、高血圧、頭痛、不眠なども誘発しやすい。循環障害は大腿部の静脈に血栓を発生させることが多く、そのため脚を切断せざるをえなくなったステロイドユーザーは多い。精神的にも攻撃的になり、躁鬱的な精神障害に陥りやすい。妄想や幻覚を経験したりすることもある。殺人をも引き起こした例も多くある。同時に覚醒剤を摂取し相乗効果を起こし、殺人にまで発展した例が国内にもある。
- (11) これを挙げているのは、正確には IOC の関連団体 WADA (The World Anti-Doping Agency) である。WADA の公式ホームページ参照 <http://www.wada-ama.org>

- (12) JOC アンチ・ドーピング規程 第4章 制裁 第21条 競技者に対する制裁は、日本代表選手の認定取り消し、および本会に関わる事業への参加資格の停止である。(1) 最初の違反に対しては、2年間の資格を停止する。(2) 2度目の違反に対しては、永久に資格を停止する。
- (13) DE IV, p555
- (14) 同上
- (15) 「法と道徳」というと、法は道徳の根拠をもつか、あるいはもつべきか、という問題が議論されるかもしれない。あるいは、最近良く議論されている、「日の丸、君が代」、臓器売買、売春、徴兵拒否といった問題から、法によって道徳を強制することは許されるか、あるいは、法に先行する道徳的権利は存在するか、ということも議論されるかもしれない。いずれにしても、「法」と「道徳」の関係はこのように密接であるとはいえるだろう。
- (16) 森鷗外『山椒太夫・高瀬舟』新潮文庫、p226
- (17) 同上 p239
- (18) 同上 p239
- (19) 同上 p228
- (20) Gilles Deleuze, *Spinoza — Philosophie pratique*, Paris: Les éditions de Minuit, 1981, p35
- (21) 増田晶文『果てなき渴望—ボデビルに憑かれた人々』草思社、2000、pp218-219
- (22) 三島由紀夫「實感的スポーツ論」三島由紀夫全集第三十一巻（新潮社、1975）p333
- (23) Gilles Deleuze & Felix Guattari, *L'anti œdipe: Capitalisme et schizophrénie*, Paris: Les éditions de Minuit, 1972, p352
- 「機械」とは、静止しているものが原動力を注ぎ込まれることによって動くようになる何か、ではない。むしろ動きそのものであり、そこで展開されるさまざまな力の関係である。
- ドゥルーズ+ガタリの欲望論については、宇野邦一『ドゥルーズ 流動の哲学』講談社選書メチエ、2001、pp135-163 参照。
- (24) スピノザ『エチカー倫理学—』(下) 畠中尚志訳、岩波文庫、1951、p51
- (25) だから「欲望」は満たされるべき欠如などではない。「欲望は何ものをも欠如してはいない。欲望自身の対象をも欠如してはいない (Gilles Deleuze & Felix Guattari, *L'anti œdipe: Capitalisme et schizophrénie*, p34)」。
- (26) フランス語 ca はドイツ語の es にあたる。
- (27) Gilles Deleuze & Felix Guattari, *L'anti œdipe: capitalisme et schizophrénie*, p7
- (28) 浅田彰「<対話>ドゥルーズ=ガタリを読む (今村仁司との対談)」『逃走論』ちくま文庫、1986、p82
- (29) DE IV, p392
- (30) 『ヘルタースケルター』の初出は、雑誌『FEEL YOUNG』(祥伝社)の1995年7月号から1996年4月号までの連載であった。りりこは『ヘルタースケルター』雑誌連載時、雑誌掲載漫画に

おける読者人気キャラクター第一位であった（平島奈津子「美しさの深層心理」『イマゴ 1996 vol.7-2』 p28 参照）。

- (31) 岡崎京子『ヘルター・スケルター』
- (32) DE IV, p392
- (33) 講義のタイトルは、“Le Gouvernement de soi et des autres: le courage de la vérité.”
- (34) Michel Foucault, *Fearless Speech*, Edited by Joseph Pearson, Semiotextet, 2001, p16

参考文献

- Michel Foucault, *Les mots et les choses. Une archéologie des sciences humaines*, Paris: Gallimard, 1966
- Michel Foucault, *Histoire de la sexualité, vol. 2: L'usage des plaisirs*, Paris: Gallimard, 1984
- Michel Foucault, *Histoire de la sexualité, vol. 3: Le souci de soi*, Paris: Gallimard, 1984
- Michel Foucault, *Dits et écrits, vol.4*, Paris: Gallimard, 1996
- Michel Foucault, *Fearless Speech*, Semiotextet, Edited by Joseph Pearson, 2001
- Gilles Deleuze, *Spinoza et le problème de l'expression*, Paris: Les éditions de Minuit, 1968
- Gilles Deleuze, *L'anti - œdipe: Capitalisme et schizophrénie*, en collaboration avec Félix Guattari, Paris: Les éditions de Minuit, 1972
- Gilles Deleuze, *Dialogues avec Claire Parnet*. Paris: Flammarion, 1977
- Gilles Deleuze, *Mille plateaux — Capitalisme et schizophrénie 2*, en collaboration avec Félix Guattari, Paris: Les éditions de Minuit, 1980
- Gilles Deleuze, *Spinoza — Philosophie pratique* Paris: Les éditions de Minuit, 1981
- Gilles Deleuze, *Foucault*, Paris: Les éditions de Minuit, 1986
- Gilles Deleuze, *Pourparlers 1972-1990*, Paris: Les éditions de Minuit, 1990
- Sports Illustrated* July 8.1991.
- WADA (The World Anti-Doping Agency) 公式ホームページ <http://www.wada-ama.org>
- 浅田彰「<対話>ドゥルーズ＝ガタリを読む（今村仁司との対談）」『逃走論』ちくま文庫、1986
- 宇野邦一『ドゥルーズ 流動の哲学』講談社選書メチエ、2001
- 岡崎京子『ヘルター・スケルター』祥伝社、2003
- カール・ハインリッヒ・ベッテ、ウヴェ・シマンク、木村真知子訳『ドーピングの社会学—近代競技スポーツの臨界点』不昧堂出版、2001
- スピノザ『エチカー倫理学—』(上) (下) 畠中尚志訳、岩波文庫、1951
- 高橋正人、河野俊彦、立木幸敏『ドーピング スポーツの底辺に広がる恐怖の薬物』講談社、2000
- 辻井喬『ユートピアの消滅』集英社新書、2000
- 日本オリンピック委員会『I O C 医事規程と J P N ドーピング・データベース』ぎょうせい、1998

平島奈津子「美しさの深層心理」『イマゴ 1996 vol.7-2』

増田晶文『果てなき渴望—ボディビルに憑かれた人々』草思社、2000

三島由紀夫「實感的スポーツ論」『三島由紀夫全集第三十一卷』新潮社、1975

三島由紀夫「ナルシシズム論」『三島由紀夫全集第三十二卷』、新潮社、1975

森鷗外『山椒太夫・高瀬舟』新潮文庫、1968

吉見正美「ANABOLIC STEROID WHAT!？」体育とスポーツ出版社、1998

For the Other Space

〈Summary〉

Hiroshi Ishikawa

There's no place beyond our life.

All we can do is to transform this place into other places.

The concept of “heterotopias” by Michel Foucault mentioned such other space.

In this thesis, I address the desire and ethics in contemporary societies that are involved with doping and cosmetic surgery, and attempt to articulate “for the other space”.